

ファクトリアル文庫

原板の変遷で捉える
カメラの個人史

西 志郎

ファクトリアル 出版会

「写真には、レンズとフィルムと思い出の三つしかファクターはない。」－ 西 志郎（1994年）

30年前、そんな生意気を言ったのか …。（2024年）

まえがき	4 ページ
第 1 章 個人史以前の昔話	
・ フィルム以前のガラス原板	5 ページ
・ 西村家、祖父の写真	7 ページ
・ プレート・テンゴール	9 ページ
第 2 章 歴代のカメラで綴る個人史	
・ 1台目: マミヤ 16 スーパー	11 ページ
・ 2台目: オリンパス「ペン D」	13 ページ
・ トプコン PR	15 ページ
・ スーパーセミコンタ 520	17 ページ
・ 花文字の初代ペン F	22 ページ
・ 3台目: オリンパス ペン FT	23 ページ
・ オリンパス OM-1	25 ページ
・ 余談: ハーフサイズの終焉	27 ページ
・ 4台目: ペンタックス ME + 35~105 ズーム	29 ページ
・ 5台目: コニカ C35 フラッシュマチック	32 ページ
・ 6台目: キヤノン スーパー 8	34 ページ
・ 7台目: リコー FF-1	37 ページ
・ ミノックス 35	41 ページ
・ 8台目: CONTAX T2	42 ページ
・ ローライ A26	45 ページ
・ ローライ 35	47 ページ
・ 9台目: カシオ LV-20	49 ページ
・ IXY デジタル 200	50 ページ
・ 10台目: Foma N704i μ 携帯電話	52 ページ
・ 11台目: Canon パワーショット G11	53 ページ
・ 父の遺品、ミノックス B	57 ページ
・ 秀逸なるミノックスのリストストラップ	59 ページ
・ 12台目: Canon パワーショット G12	61 ページ
・ 13台目: 「iPhone SE」	62 ページ
改訂2版 あとがき	65 ページ

まえがき

この小文、カメラの技術史ではない。カメラを通じての個人史、というのならまだしも近い。更に言うなら、フィルム規格とかデジカメの画素数のような技術的スペックに翻弄され、好むと好まざるとに拘らず、家族写真を取り続けた人間、私一人でなく曾祖父の代から娘や息子の世代に至る人々が使ったフィルムカメラからデジタルへの交替と個々人との繋がりを一望したもの、とでも言おうか。同じ時代を体験していても、その時の年齢と家族や会社の中での立ち位置などで、見える景色は異なるもの。

「エネルギー源変遷で捉える腕時計の個人史」のカメラ編、と言う切り口がスタートポイントだったのは確かながら、着手から脱稿までに 2 年経過したこともあり、結局誰に向けて書いたのかがハッキリしない、締まりの悪い結末になってしまった。

しかし、字にすることで初めて見えて来たものもある。それは、何であれ厳選の末、長く使うという子供の頃からの自分の性癖と、行き掛かり上、という余り積極的とは言えない事情から、重さ 1 トンを超えるカメラ雑誌を一夏かかって通読しながらスクラップした経験、そして 300 台を越える骨董カメラを岳父から引き継いだことで追体験した実機操作、それらの年代が違ふことに依る俯瞰的な視野、とでも言おうか。壮大な時間を無駄に費やしたことへの言い訳、という表現もあながち外れとは言えないが …。

アルバムという「モノ」が衰退する理由も見えて来た。整理せずとも、iPad の中に置いておくだけで、誰かの写真を検索した途端、顔認識 AI が同じ顔を自動的に探し出してストーリー展開してくれるのだ。同じ人物でも歳を取れば変わるし、男なら髭を蓄えて見たりもするが、AI はそれらを見事に見抜く。これまで私は、テーマ別のアルバムを作ったは良いが、何を主軸にするかは曖昧なため、ある写真を探すとき、中々一度では探し当てられなかった。

自分の流儀はそう簡単に変えられないが、その整理は多分私の仕事ではない。そうなった時に手間を取らせる子供達の成長記録の 8 ミリフィルムはブルーレイと互換性がある DVD に焼き直すところまでやったのに、その為にプレイヤーを増やすのは嫌だと言う。何をか言わんや …。

第 1 章 個人史以前の昔話

フィルム以前、ガラス原板の時代

写真術の歴史に、湿式だの卵白だのガラス原板だのが登場することは知識としては持っていた。鹿児島という土地柄、江戸末期の島津斉彬のお陰で、西洋のものが早くから色々入っていたことも一応知ってはいたが、自分には無関係な大昔の話と思っていた。

我が家に何やら由緒ありげなガラスのネガがあることは少なくとも父が亡くなった直後に気付いていたが、所謂陽の目を見る、という意味では今回が初公開。



昭和 25年 4月 21日付け、毎日新聞の新聞紙に包まれていて、寸法は所謂手札サイズ。端が少し欠けている。

パソコンの画像処理ソフトにはネガポジ変換機能がある。マニュアルなしの試行錯誤の末、浮かび上がったのがこの写真である。



被写体は正しく私と妹、場所は他の写真で確認済みの鹿児島の家。左右もこれで正しい。なぜそんな古いガラス原板が未使用のまま戦災をくぐり抜けたのだろうか？ 地元の高校で教職にあった父が学校の実験室で見つけ、同僚が昔のカメラに装填して撮影、現像まではできたものの、引き伸ばしと焼き付けの段階で頓挫したのだろう、というのが、私の推測。それ以上は確認する術を失ってしまった。

西村家、祖父の写真

弟が亡くなって無人になった実家の整理をしていたら、これまで目にした覚えのない祖父母の写真が見つかった。



右から順に、1873年生まれの祖父重助、1885年生まれの祖母ムメ、1907年生まれで父より 7歳年上の長女悦子。嫁ぐ日、両親に別れの挨拶の場に写真館を呼んだのだろう。迫家に嫁いだのは 1936年なので、重助 63歳、悦子 29歳、という計算。写真には鹿児島田島写真館のエンボスが残ри、台紙にも同じ情報がある。





取り繕わない自然な表情がスナップ写真の取り柄。素人写真としてはこの程度の出来栄で十分。祖父母であることに疑いはない。



使ったカメラに確証はないが、可能性は高いのがメーカー名も記されていない初期の稚拙な一眼レフ。二眼レフと同じように上から覗いてピントを合わせた後、ミラーを跳ね上げ固定、ファインダーの前板を上げると枠を残して素通しになるので、それで照準を合わせる仕組み。シンプルな構想は悪くないが、機械工作精度が町工場のレベル。何の面白みもないので処分してしまい、カメラの遺影だけが残った。

プレート・テンゴール

前述のカメラとは逆に、祖父重助が満洲の大連を訪れた際にこれを購入した領収書が残っている。

大正 15年（1926年）、5月 11日付、大連市伊勢町 32番地、樫村洋行の発行、品物は「ゴルツ プレートテンゴール」、カメラ、ケース付き、名刺パックフィルム 2本、しめて 41円 80銭。宛先はイワキホテル方、上様としか記されていないが、ここに取り上げるのには訳がある。

プロでなければ扱えなかった写真機を大衆化して行く最初の関門が、フィルムを未感光のままユーザーに渡し、撮影後はそのままプロの手に戻すことだった。1888年、当時世界一の工業国だったアメリカのコダックから、フィルムをロール状のまま暗箱に収め、「No.1」の型番で登場したものが「ボックスカメラ」の嚆矢とされる。1枚撮影する毎にネジ巻き状の金具で移動して行く機構そのもので特許取得したため、他社は手を出せない。「ボックス・テンゴール」の発売が、1926年。レンズの描写力では泣く子も黙るツァイス・イコンと社名を変え、「ベビー・ボックス」が世に出たのが 1930年。従って、1926年の時点で、満洲では（板状の）プレートフィルムを用いるものしか入手できなかった。そして、それは一瞬で時代遅れになってしまう。

そうであっても、祖父がそのカメラで撮影した写真が残っていたなら、この書き物の序章にどれだけ花を添えたことか …。



残念ながら前ページの写真はカメラも違う後の時代のものなのだ。

西村重助は、鹿児島市潮見町で海産物の問屋、西村重助商店を営んでいて、電報で取引した時代の発電略号は（二）の一文字。大正 5 年（1916年）鹿児島に電話が開通するのと同時に、「長距離 414番」で架設するなど、盛業だった様子。1926年には 53歳の男盛り。鹿児島から大連へは、門司から船に乗った可能性が高い。月に 9便程度の就航、620海里は一晩寝れば着く距離、1等の船賃が 55円。

1932年 3月 1日、満洲国建国宣言。投資先としての満洲への着目は早く、昭和 13年（康德 5年）、1938年に満洲重工業開発株式会社の乙種株券 10株を自身名義で購入。昭和 17年（康德 9年）、1942年には 10株買い増しの上、息子（即ち私の父）の名義でも 10株残している。共に日本国通貨で 500円。家一軒が千五百円で建った時代。船は、鹿児島から長崎経由で大連まで直行便があった時代もあり、満洲視察旅行は複数回だった可能性もある。どの様に戦争への道を進み、敗戦というまさかの結果に終わった歴史の経緯はここでは省略。

「プレート・テンゴール」の値段が高かったか安かったかは、さておき、何故、残らなかったのか？ 答は簡単、市街地の 9割以上を戦禍で失った鹿児島、家屋敷ごと全てが空襲で灰燼に帰してしまったから。終戦の玉音放送を戦地の対馬で聞いた父が召集を解かれて鹿児島に帰って来たとき、街並みがあれば見える筈のない自分の家の一帯が駅から見通せることに驚いてその辺りまで来て、「ここだ！」、と確信できたのは、焼け跡に残されたピアノの鉄骨フレーム。一瞬、象の骨かと思ったそうである。



私の一家が住んだのは鹿児島市内、城下街とは甲突川を挟んだ反対側。母の実家は日豊本線の汽車で 20分ばかりの重富という村だった。当時は歳が 15 違う叔父がその区間を汽車通学していたこともあり、実家へは頻繁に連れて行って貰い、祖父母や本家の親戚の多くの大人達に、構って貰って育った。左の写真は、焼酎の作り酒屋、芋倉庫の框に腰掛ける私と本家の長女。



右は、家族が知らないうちに全国公開されてしまったもの。婦人雑誌の投稿したのは、本家のお抱え運転手。この集落から鹿児島への道路は国道10号線とは名ばかり、海沿いの道は台風が来る度に高波で壊され、最後まで舗装が遅れた。そんな田舎なのに、戦後いち早く自家用トラックを持っていたのは、トヨタが作ったトラックをキャンペーンで山陽路、九州路を走らせた挙句、南端の鹿児島で安く売り出したのをすかさず売って貰ったのだと聞いたことがある。その写真は見た覚えがあるが、ボンネットの大きさは、乗合バスと同じだった。戦後間もない当時、エンジンはさておき、そこから後の駆動系は全部バラして組み立てるくらいの整備の腕が無ければ自家用車は持てない時代、写真の腕なんぞ、基礎教養の範疇だったのだろう。私を機械マニヤに育てた叔父も、現場での実学はこの運転手に鍛えられた由。ネガが残らないから、撮影したカメラは不明だが、良くて二眼レフ、下手をすれば名前も付かないような安カメラだろうけれど、肝心の写真はご覧の通り、ドンピシャ写っている。雑誌のキャプションでは、夏の朝、ラジオ体操をする元気な兄弟、のような説明だったが、実は、足元の地面に引いてある一本の線がヒント。駆けっこのスタートラインに立って気の強い妹が私に勝負を挑んでいるのだ。私はその時点で不戦敗。

第 2 章 歴代のカメラで綴る個人史

1台目： マミヤ 16 スーパー

小型カメラ = オモチャ、ではない間宮精一氏の設計になるれっきとしたマミヤ光機の 16ミリフィルムカメラ。最初の型が出たのが 1949年、私が叔父からお下がりにも与えられた「スーパー」が 1951年の製品。



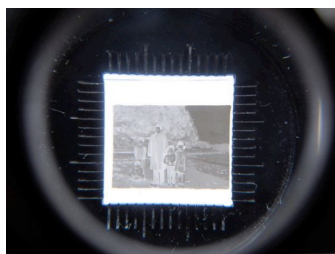
後のミノルタ、千代田光学の「ミノルタ 16」と双璧を成す、しっかりとした名品には違いないが、それは後々の理解であって、子供にそんなことは判らない。遠足のときは勇んで持参するのだが、子供の腕でもそれなりに写るのは子供用に設計されたカメラ。その初代王者、「フジペット」(6X6版)の発売が 1957年、私は 9歳 = 小学校 3年。



当時、誰もが持っていた訳ではないけれど、裕福な家庭の子供はそれが定番だった。逆に言えば、中学生になったら、そんな子供用では格好悪い。即ち、これを使った年代は 1948年生まれから 1951年頃までに限定される、と言う、極めつきにスライスされて行く時代。

小型映画の 16ミリフィルムから縦長に切り出すネガサイズが 10 X 14 ミリ。未だ露出すら自動でない時代、距離を目測で合わせようが、しっかり三脚に載せようが、成功率は極めて低い。

それから幾星霜、パソコンの写真処理ソフトウェアのネガポジ反転機能と昔ながらの接写技術を駆使して得たのが、左のネガ。ルーペの枠に刻まれている目盛りは 1目盛り 1ミリ。



現れたのが右の映像。右手奥が私、手前にしゃがんでいるのが 5歳下の弟。左端が 2歳下の妹、その右は従兄弟。オーバー姿は（カメラをくれたのとは別の）叔父。場所は、逗子と鎌倉が接する辺りの海辺、鎌倉時代に宋との貿易船を入港させるための痕跡が若江島として微かに見えていた時代もあったが、今は埋め立てられて逗子マリーナになった。

このカメラでも腕が良ければこう言う写真が写るのは確かだが、誰でもができる技ではない。となると、撮影は元の持ち主、カメラをくれた叔父、と言うことになる。現物はその叔父に返した後、馴染みの奈良の骨董カメラ屋さんに寄贈したと聞く。

2台目： オリンパス 「ペン D」

我が家の経済状態が急変したのは私が 中学 2年の頃。後にそのカラクリを知るのだが、祖父が戦前鹿児島に残した土地が市街地の拡大で繁華街とまでは行かなくても、お店の商売が繁盛するような土地柄になったのを機に、それまでは細々借地料が入るだけだった土地の底地をドンドン売ったのだ。それまでは友達のお古で我慢させられた自転車、欲しくても買って貰えなかったカメラなど、子供にもその恩恵が及んだ。カメラには、関西への修学旅行という錦の御旗があった。



目をつけていたのは、オリンパスの「ペン D」（写真左）と「キャノン・デミ」（写真右）。日本橋の高島屋で開かれたカメラショウまで出かけて行って現物に触り、ペン Dにした。「マミヤ 16 スーパー」をくれた叔父は結婚して子供が生まれ、カメラは「オリンパス ペン」を使っていたから、その影響下にはあったと思う。

それまでの特訓が生きたのは、高価なリバーサルカラーフィルムによる一発必中の技。ネガカラーだと、多少の露出ミスはプリントの際に補正できるが、ポジフィルムにはその機会がない。カラープリントは 1枚 70円。国鉄の初乗りが 10円の時代だから、今の感覚だと 1,000円にもなる。中学 3年の関西への修学旅行の写真は 72枚中、失敗は 1枚だけ。アマチュアにはプリントの手段がない時代、友人を家に呼んでスライド映写会をした記憶はあるが、時代が変わり、素材が何であれ、残ってさえいれば、簡単に分けてあげられる時代になった。貴重なお宝映像は今頃になって喜ばれる。



左は父が大学の同級生を通じて招待券を入手してくれた東海道新幹線
 開通前の公開試験列車車中にて。別のカメラで父が撮影、私はハーフ
 サイズには珍しいハードケースで首から下げていた。右は叔父のところ
 に長男が生まれた頃の作例。リバーサルでなければこの色は残らない。

トプコン PR

自分のカメラを手に入れた後なのに、父の大学研究室の備品を借りて使った記憶がある。一眼レフ最大の特徴は、望遠や広角など画角の異なるレンズが使えること。廉価版路線の「トプコン PR」は、レンズ交換を諦めることによってコストを下げた。その代わり、標準レンズの前に望遠か広角のアダプターレンズを追加することによって要望に応えたのだ。



レンズ前端のネジ山はフィルターの重さを支えるのが精々の細かいもの。そこに重いアダプターレンズを付ければネジ山を潰す事故が起きる。実際にやってしまい、どうしたのかは記憶にない。研究室の備品を持ち出して息子に使わせた挙句、壊したとは言えず、父も釈明に苦労しただろう。

東京光学が新機軸の統合を待たずに 63年の発売を急いだことには内情があった。「一眼レフとしての露出計連動」、「TTL 測光方式」のいずれもが、世界初、の栄冠を勝ち取っているのだ。

最初は外付けアクセサリとして登場した電気露出計を小型化してカメラの一部に組み込んでしまうのはアイデアではあるが、革新的技術進歩とは言えない。メーターの指し示す測定値が何らかの形でカメラの絞り値やシャッター速度の設定と連動するようになって初めて、ビルトインの意義が現れる。こうした「フルプルーフ化」は、先頭を行く高級機のユーザーには余り評価されず、後を追う中級機の方が先に実用化に漕ぎ着ける風潮にあるのは、カメラに限らないが、ともあれ、一眼レフに連動露出計を搭載したのは、「ウインクミラー S」が世界最初であった。

また、露出計の測光素子がセレンから CdS に進化すると同時に、外光を測定するのではなく、TTL (Thru The Lens = レンズを通した) 測光のアイデアが生まれる。旭光学は 1960年のフォトキナで構想発表したものの、実際に装備した「ペンタックス SP」の市販は 64年にずれ込み、トプコン「RE スーパー」は 1年早く市販したため、世界初の栄冠を鼻の差で勝ち取っている。旭光学は余程悔しかったと見えて、広告にはいつも 1960年の発表を引き合いに出して、自社が世界初、と謳っていたが、TTL の新語を創出したのはトプコンだ。ともあれ、「SP」の製品としてのまとめ具合は今日見ても立派なもので、中途半端な半完成品を出さなかった企業姿勢は賞賛に値する。

レンズシャッター式の長所であった筈の「コンパクト、軽量」にしがみつくのをおぼれた時点で勝負はついてしまった。結局、一眼レフの業界全体が新機能追加による肥満の歴史を繰り返すことになる。



写真は、鎌倉駅で発車を待つ下りの横須賀線電車 70系。(左端に名物だった時計塔がチラリと見える。) 撮影は 1962年と判明しているので、前節、新幹線車中での父の撮影も、同じ トプコン PR だったと考えるのが自然だろう。

スーパーセミイコンタ 520



私が使ったのではないが、ネガフィルムキャリアに 1964年の日付が残る。高校生の私が ペン D を愛用した時代にこのクラシックカメラを愛用した女子高生がいた。父親の愛機は、ドイツ、ツァイス・イコンの名機、「スーパーシックス」。フィルムサイズが 6 X 4.5 センチと僅かばかり小さい弟分の「セミイコンタ」は、その分携帯に便利で、戦前の日本人には人気が高かった。とは言え、「もはや戦後ではない」と言われた時代に蛇腹の骨董カメラを振り回す女子高生はかなり珍妙だったのではなかろうか？ 実際、旅先ではストーカー紛いの経験もしたらしい。

知り合った頃、「スーパーシックス」にカラーフィルムを入れて使っていたのは覚えている。私と結婚することになったとき、それを嫁入り道具に加えて欲しいと言ったのに、父親は首を縦に振らなかった。その話に尾鰭を付けて面白がった叔父が同じものを家内にくれたが、子供の成長記録を撮る実用機としては機動力不足でお蔵入り。昔の「セミイコンタ」は、晩年、私が預かっていたが、遺品になったら家内に返すのがスジ。長年別々に保管されていたカメラとネガフィルムは最近になって再会を果たした。そういう経緯なので、ここに紹介する次第。

3台目：「オリンパス ペン FT」 への長い道程

ペン D はよく出来たカメラだったから、中学以来、大学に入るまで使った。退色性に強いリバーサルで撮影した写真は後に貴重な資料となる。



1963年 8月、場所は当時大隅半島の国鉄の終点だった海潟。提供を求められたのは半世紀も後の 2012年。宮脇俊三氏らによって有名になった「最長片道切符の旅」、東大の旅行研究会の学生がここから出発したのがその嚆矢だったと言う。雑誌への記事掲載に際して問い合わせた友人の話では、このハーフサイズの画像以外、新聞社にもデータの保存がなかったと聞く。当時のカメラに日付を記録する機能はないから、その特定で混乱したのが、到達証明としての入場券。38年と 40年、二度行ったことは他の資料で確認できたが、受験勉強そっちのけだったことは、もう時効にして貰おう。



ペンシリーズ「必要悪」のアクセサリシュー

カメラの上部に付属部品を取り付けるための統一規格接続金具、「アクセサリシュー」は、元々、何のためだったのだろうか？ 最初は外付けだった距離計や露出計は直ぐに内蔵が当たり前になったので、実際にそこを足場にしたもののトップは、閃光電球を電池で発火させるフラッシュガンが小型になり、消耗品不要な構成に進化した「ストロボライト」だろう。鉄道車輛における連結器のように、機能優先の部品なので、意匠上は、歓迎されない。かと言って、なければ困る「必要悪」みたいな存在だ。

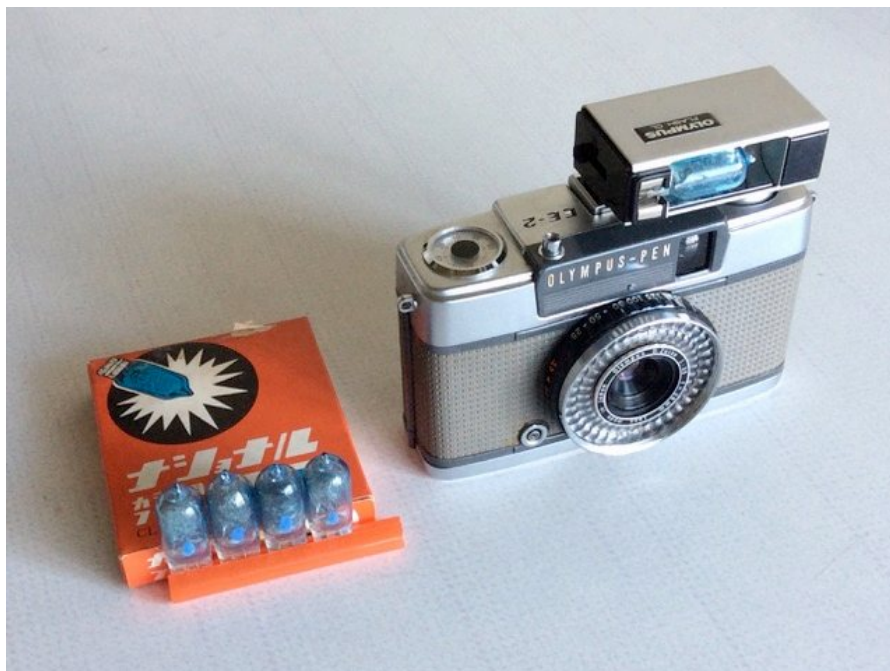
ハーフサイズ・ブームの元祖、初代「ペン」は 1959年の登場。米谷美久氏の設計コンセプトは、入門機というよりもサブカメラの位置付け、隅々まで安っぽいところは微塵もなく、アクセサリシューもカッコリ装備していたのは流石。女性をターゲットの中心に据えて 61年に登場し 73年まで続いた「EE」シリーズの場合、初代はシューを省略したが、68年の「EE-2」で復活したのは、電気接点組み込みのホットシューの使い勝手を評価したのだろう。62年登場の高級機「D」シリーズは、軍艦部に露出計の表示窓が加わったとはいえ、スペースがない訳ではないから、省略はやや不可解。露出計が高感度になった後継機でも変化なし。その代わり、という訳なのか、カメラの脇に寄り添う極めてコンパクトなフラッシュガンが純正で用意されたので、私はそれを使った。



(左から、初代ペン、2台目が「EE」、3台目は「EE-2」、右端は専用の「ペンフラッシュ」を装備した「D」。)

ちょっとここで脇道に逸れる。

下の写真、主役はカメラではなく、オリンパス「フラッシュ GL」、見ての通り、マッチ箱の大きさしかない専用フラッシュガンである。



ピーナッツ球、と俗称したように思うが、発火接点の構造を究極まで単純化した小型フラッシュバルブを 15V の積層乾電池で発光させるもの。カメラは EEの改良型 EE-2、シンクロのためのコネクターは残っているが、シューはホットシューに進化しているので、この姿で発光する。前の写真ではペン D の左に並んでいるが、登場は後である。

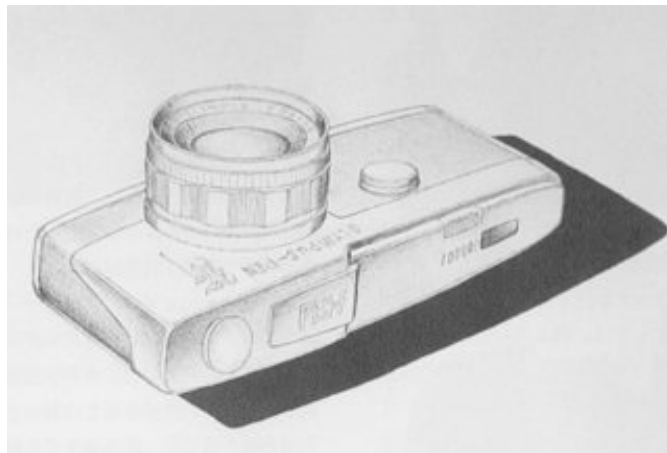
使い捨てのバルブ、AG-1B の型番、B はカラー用のブルーだろう。時代はランニングコストの高いフラッシュバルブからストロボへの過渡期にあったから、10発 260円のコストが足を引っ張ったのだろうと思う。

後で登場するリコー FF-1、単三電池一本で作動するストロボが売りながら、ここまで小さくは作れなかったし、年代にして 10年以上のギャップは正に結果論。出番の少なさを考えれば、マッチ箱サイズのフラッシュユニットには大きな存在意義があったと思うけれど、バルブが生産中止になってしまえば、もう過去の遺物にしかない。（未開封のバルブにはマニアックな値段がつくらしいが …。）閑話休題。

花文字の初代ペン F

ハーフサイズの一眼レフ、「ペン F」は、1963年の登場。画面が縦長なので横方向に跳ね上がるミラーから光路設計が始まり、それまでの定番のペンタプリズムを廃したお蔭で軍艦部の三角屋根が消えた。

当時の評判の中に「スッキリしたな …、ペンは邪魔だったもの。」との一言があるが、それは結果論で、真骨頂は画面を半分で割り切ったことで得られたコンパクトさですらなく、最高速 500分の 1秒までストロボ同調する高速回転のフォーカルプレーンシャッターにあった。横走りであれ縦走りであれ、それまでのフォーカルプレーンシャッターは幕速が遅く、スリット幅を減らすことで、露出時間を短くしている。そのことの短所は皆、表に出したがいけないけれど、走っているクルマを撮影すると、右から左へ通過するときとその逆方向では長さが違ってしまい、というように、実は根が深い。ともあれ、素人には判り難い問題で、評価がデザイン面の目新しさに集中したのも止むを得ないところではあった。



軍艦部に突出部がない、ということは、正に航空母艦状態。その恩恵を最大限贅沢に使い、第一優先のアクセサリースキューすら切り捨てて、米谷氏はロゴのみを配した。初期のスケッチからそうになっているから、それがデザイナーの美意識であることは判る。が、高速シンクロを誇りながら、どこにストロボを付けよ、と言うのか？ オリンパスの回答は、ファインダーのアイピース部に取り付く外付けのシューアダプター。ペンタプリズムの三角屋根との整合性に悩む他社は、一様にそこへ逃げていたから、苦し紛れの対策はオリンパスだけの話ではないが、芸のなさは否めない。

3台目： オリンパス ペン FT

3年後の 1966年、「F」と寸分変わらない大きさの中に TTL 露出計とセルフタイマーを見事に組み込んだ新型の「FT」が登場。設計は先代と同じく米谷美久氏。私は氏の工業デザインセンスを十二分に尊敬していた。最初からその構想がなければ、そうは行かない妙義。（岳父のように、先代の花文字の F を愛でる向きもあり、生前に譲り受けたものが私のコレクションに加わっている。）機能追加で肥満体に成り勝ちな一般的二代目らしからぬ端正な出来映えに納得した私は、愛機の「ペン D」から乗り換えた。資金の出所は、あちこちから貰った合格祝い。

ところが、妙なところから横槍が入った。我が家との関係性不詳ながら、良く出入りしていた作家の前田純敬氏。「そんな玩具、後で後悔するから止めておきなさい。」と口煩く宣う。お金を出してくれる訳でないにしては手強かった。結局、説得されずに自分の欲しいものを買ったら、心底ガッカリしておられた。（余談なので、写真は後で掲出。）

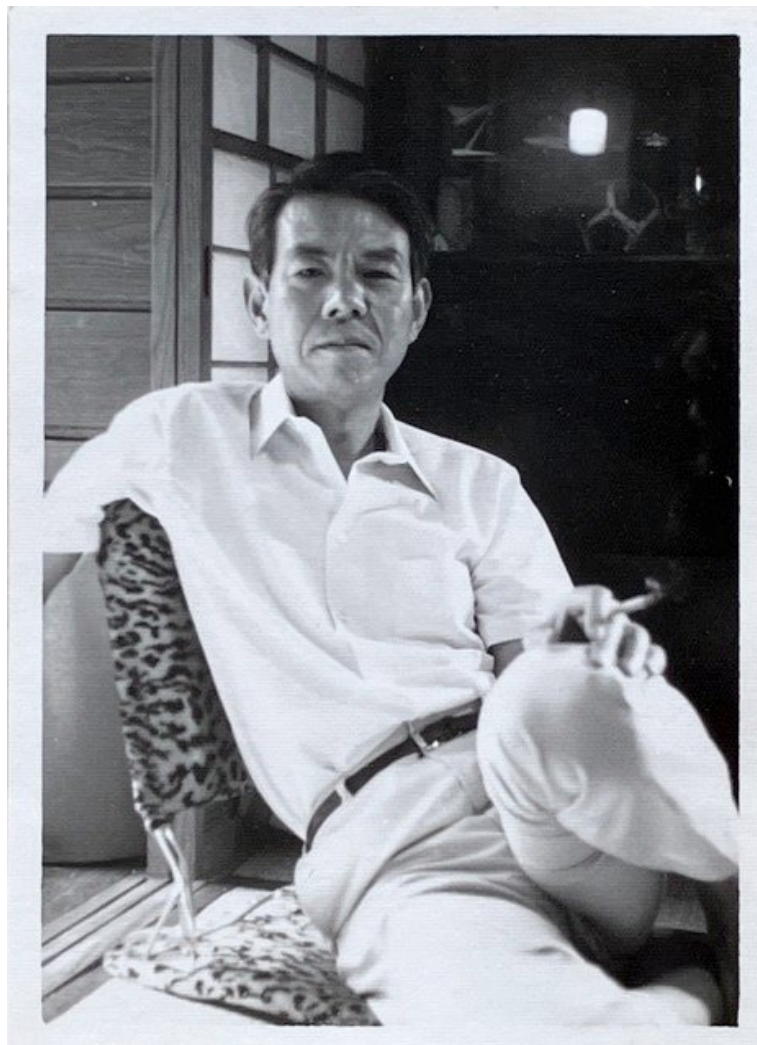
件のアクセサリシューへの姿勢には何ら進歩がなく、「D」のフラッシュガンも互換性がなくて取り付けられない。時代はフラッシュからストロボへと移行していたこともあり、私は意匠だけを拝借して、三脚穴を使ってカメラの脇に横並びになるアクセサリシューを自作した。



（左と中央は同じ「F」。中央は外付け露出計と純正アクセサリシュー・アダプターを装備。右が「FT」。右端は自作のアダプター。）

先に触れた前田純敬氏のポートレートが FT の習作ネガに残された。出来栄はネガサイズの大小ではない。撮影者との心の距離にあることは多くのプロ写真家が指摘している。

昭和 24年の芥川賞を井上靖氏と競い、次点に終わった「夏草」が熱心な支持者たちの努力で単行本として世に出たのは亡くなった直後の2004年のこと。著者の写真、若かりし頃の眼光の鋭さは年齢相応に消えていて、作家の肖像写真としては、若いときに撮った私に利があったと思う。鹿児島文学館が望むなら、著作権ごと寄贈するけれど …。



前田純敬氏（1966年、44歳、鎌倉にて）

オリンパス OM-1

世界的な名機、ペン FT と同じ米谷氏の設計に成る M-1 の登場は 1972 年。(M-1 の名称がライツ社からの先願クレームで、直ぐに OM-1 に変更された。) 米谷氏はペンタプリズムを目の敵にはしていないが、シャッターもコンベンショナルなフォーカルプレーンシャッターに戻り、折角の特色も薄れた。色々ヤンチャを一通りやった後で先輩諸氏と同じ路線に回帰する辺り、クルマで言えば、ホンダの路線に通じるところがある。OM-1 になっても、ニコンやキャノンを筆頭とする、節操なく大型重量化して行く一眼レフの傾向に歯止めをかけた功績は大きいけれども、ペン F の輝きに、自ら影を落としたのは惜しかった。

さて、ペンタプリズムの復活で、アクセサリシューはどうなったか？ 三角屋根を可能な限りボディに埋没させて稜線を絞ったため、シューの取り付く余地は全くない。何もしない、というのはあり得ず、そこで出たのは、またぞろ、見た目優先が良ければ外して下さい、実用性が大事ならデザインには目をつぶして下さい、というあなた任せの外付け部品。ペンタ部に極小取り付け穴が特設されていて、アイピースのように他の目的のところへ割り込むのではないだけマシだけれど、屋根の尾根筋が細い分、物干し台平面との不整合が目立ち、意匠上の配慮は丸で感じられない。

1975 年の後継機、OM-2 は先代の基本設計思想を継承しつつ、リアルタイム測光など、ユニークな発想を積み重ねた点は評価できるが、アクセサリシューの意匠も改善されなかった。当時の技術レベルでは無理もなかったが、電気部品の寿命設計が未熟で、30 年経過した今、OM-1 よりも残存率が低いのは気の毒なところ。

1979 年、姉妹機の OM-10 が出た。廉価版入門機に位置付けられつつ、機構も意匠も先代からのしがらみは弱く、アクセサリシューが遂にペンタプリズム部に組み込まれた。内部の臓物による必然性からではなく、シュー前提の実に自然な造形意匠である。話は後の時代に飛ぶけれど、この OM-10 こそが、15 年の熟成を経て、娘の愛機となる。手からスルリと落として動かなくなった 1 台目は、岳父が予備機と交換、もうフィルムカメラは使わなくなったようだが、飾る目的の 3 台目が完品のまま実家でじっと陽の目を見る日を待っている。



(左： OM-1、手前が外したシューアダプター。 中央： OM-2、シューアダプターを装着した状態。 右： 最初から備えのある OM-10。)

掲載写真の角度からは見え難いが、OM-10 のフィルム巻き上げレバー前方、ASA 感度設定ダイヤルは、使用頻度の低さから崖下のガスタンクが土砂崩れで半周近く埋もれたような形になり、操作性は劣化。 行き先を失ったシャッター速度のマニュアル設定ダイヤルは、ユニットごと後付けのアダプターに格下げ。 左手グリップ部の前壁に取り付いている。

エピローグ。 私は、ペン「FT」に、どうあつて欲しかったのか？ 必要悪という言葉はあるけれど、必要なものは常備前提で意匠設計すべきではないのか？ それを今日的 CG (コンピューター・グラフィクス) の技でご紹介して思いの丈をお伝えしておく。(実在はしないので、念の為。)



余談： ハーフサイズの終焉

オリンパスペンが火付け役になった「ハーフサイズ」は 35ミリフィルムの一コマ分（24ミリ X 36ミリ）を半分の 18ミリ幅で節約することにより、倍の枚数撮影できるという清貧の思想。元はと言えば、映画フィルムの規格をそのまま使った「シネサイズ」の方が正しい。日本光学は縦横比 1.5 は広過ぎると判断、32ミリ幅でニコンを設計したが、De facto Standard(事実上の標準)を重んずる進駐軍の指導で 36ミリに変更した。

私がハーフサイズに見切りをつけたのは、フィルム面積に起因する画質への不満ではなく、フルサイズが世間の主流となった後、写真入り年賀状のデザイン選定の局面で、ハーフサイズに残った少数派が虐められる局面に嫌気したからである。

年賀状という社会慣習自体は、戦前からあった。それを一定部数印刷、宛名だけ手書きして出すのは企業や商家などに限られ、一般の場合は趣味の手刷り版面から一步進んだのが、1977年登場の家庭用謄写版印刷機、「プリントゴッコ」。ホームユースのパソコンやプリンターが普及する前の時代、世間では大ヒットしたが、我が家ではほぼ同じ時期に写真入り年賀状を始めた為、使ったことはない。



前ページの作例、左が 1979年版。七五三のお宮参りの着物姿が、1975年生まれの子。まだ一歳にならない息子を抱いているのが 31歳の私。右は 昭和64年（1989年）なので、丁度 10年の歳月が流れている。子供の成長記録は年賀状には絶好の題材、世間での普及率には統計数字を持ち合わせないが、戦後の団塊の世代の最前線を走った我が家の動きが世間の先走りと考えて大きな間違いはなかろうと思う。コストはフォトカードの方が贅沢だったのは確かで、世間ではプリントゴッコから自宅のパソコンで印刷する年賀状に写真も入れる方向に少しずつ移行して行ったのだらうと思う。



家族写真の年賀状は、平成 7年（1995年）のカナダ旅行で打ち止め。日本の会社に勤めていたらそう簡単に決心はできない費用がかかっているけれど、相手に依ってはそれ自体が自慢話かも知れない、という頭も回らなかった。仕事は激務だったけれど、親の身長を抜いた子供達が黙って家族旅行について来た最後の時代、旅行は行ける時に行っておくべき。旅行の費用は教養娯楽費というよりも教育費の一環と捉える風潮、親譲りだったのかも知れない。今頃になって、そう気付く。

作例は全てフルサイズだが、カメラの機種は覚えていない。画質はその後感光剤の改良により、ハーフサイズで十分となり、後の時代にパトローネをフルプルーフに改良した段階で 24ミリ X 18ミリに先祖帰りしたのも皮肉な話ではあった。

4台目：ペンタックス ME + 35～105 ズーム

カメラをバージョンアップしたタイミングは良く覚えている。最初のネガが子供の写真だからで、1978年のこと。対抗馬はなく、一目惚れ。値段から言えば、当時世界最高唯一だったトキナーの 35～105ミリショートズームに、ペンタックスのボディを付けて買ったようなもの。



世界で初の、驚異的ワイド/ズーム
Tokina 新発売



PTZ 35-105mm F3.5
■ワイドから望遠まで完全にカバーする、世界で初のズームレンズ
■マクロ機構の組み込みによるクローズアップ撮影
■全長10mmのコンパクトデザインによる機動性
■多層膜コートによる抜群のカラーバランスとコントラスト
¥64,000 (ケース別 ¥2,000)
※ワイド(1)でも、ネガシフトOM、Kマウント、Mマウント用。

PTZ 70-220mm F3.5 マクロ	PTZ 100-300mm F5 マクロ
■全長10mmのコンパクトデザインによる機動性 ■多層膜コートによる抜群のカラーバランスとコントラスト ¥56,800 (ケース別 ¥2,000) ※ワイド(1)でも、ネガシフトOM、Kマウント、Mマウント用。	■全長10mmのコンパクトデザインによる機動性 ■多層膜コートによる抜群のカラーバランスとコントラスト ¥54,800 (ケース別 ¥2,000) ※ワイド(1)でも、ネガシフトOM、Kマウント、Mマウント用。

株式会社 トキナー 東京 東京都中央区銀座4-1-1
TEL 03-5561-1111 FAX 03-5561-1112
Tokina 株式会社 トキナー 東京 東京都中央区銀座4-1-1
TEL 03-5561-1111 FAX 03-5561-1112

ASAHI CAMERA July 1976

全域 F 3.5 は偉いが、レンズ単体の重さ 860g には閉口、一計を案じ、ポラロイド専用のカメラバッグに内張で補強した速射ケースで、重さを和らげる工夫をした。レンズの下が二重底になっていて、ストロボが収まるのがミソと言えミソ。



それまでのハーフサイズに見切りをつけたのは、描写力の不足ではない。当時流行り始めた家族写真入りの年賀状に文字を焼き込む際、35ミリフィルムのフルサイズだと選択幅が広いのに、ハーフサイズだと、あれこれ制約がつくようになってしまった DPE 体制への不満が最大の要因だった。

その後、フィルム自体の解像度はドンドン改善され、ハーフで十分、と言われるところまで行ったのは少し惜しかった。元はと言えば、ハーフサイズの名称からして失礼なもの、24ミリ X 18ミリの「シネサイズ」の方が本家本元だったのだから …。

ともあれ、ペンタックス ME の割り切り設計思想は見上げたもので、実際には出番が少ないと見るや否や、バッサリ切って、常用での使い勝手を保つ。分かり易い一例が電源スイッチ。オリンパスはオンオフの 2ポジションにバッテリーチェックが加わった特徴的な 3ポジション。一方、ペンタックスにはスイッチレバーそのものがない。フィルム巻き上げレバーを少し引き出すとスイッチオン、収めればオフ。バッテリーチェックはファインダー内の LED が瞬いて知らせる。後継機 ME スーパーが出ても、基本は変化なし。ショートズームは単体レンズに比べると、レンズの構成枚数の多さから、描写力のヌケが良くないが、一本で済む手軽さは捨てがたい。ペンタックス純正の 28～85 が出た段階で、僅かでも軽いことと、広角側を評価して乗り換えた。カメラ本体には何の故障も生じなかった

が、入れ込んだ末、バックアップ機を備えるようになる。中古市場で見つけ次第手に入れるうちに交換レンズにも手が出るのは自然の成り行き、望遠、広角、望遠系ズームまでは考える値段ではなかったが、最後の超広角 18ミリが強気一点張りの価格。銀座の中古カメラ屋に、「何回も使う訳ではなからうから、コンパチで妥協しなさい。」と説得されて買ったのがコシナーの 20ミリ。屋内撮影の使い勝手はそれで十分だった。



オリンパスにも言い分はあろうが、OM-1 から OM-2 になると、あれやこれや未成熟な電気パーツを無節操に取り入れつつ、マニアックな仕様は残すものだから、あれだけオリンパスには思い入れの強かった私も、付き合いきれず、結局買おうとは思わないまま終わってしまった。

海外への業務出張に持ち歩いたのは勿論だが、ロンドンからパリへの移動の際、撮影済みのフィルムを X線避けの鉛シートに納めて大型旅行鞆の方に入れたのは失敗だった。到着地のターンテーブルに出て来ず、翌日の訪問先プレゼンテーションは、念のため機内持ち込みにしていた一部をコピーして貰って凌いだ。ホテルに戻ると、行方不明になっていた旅行鞆が配送されていて胸を撫で下ろしたが、それ以降、カメラよりも撮影済みフィルムの方を大切に扱う習慣が身についた。国に依っては出入国検査で手榴弾でも入りそうなカメラバッグを開けさせられることがあり、たかが観光旅行にそんな大仰なものを持ち歩くのも賢くないと、気づく一因にもなった。

5台目： コニカ C35 フラッシュマチック

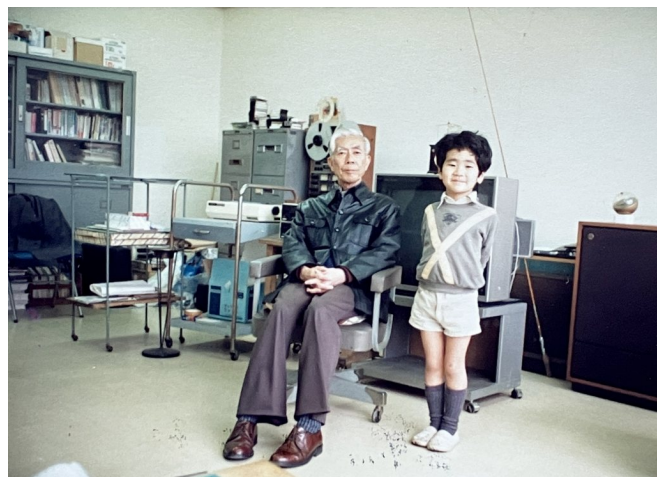
私のカメラ、というよりは家内のカメラ。良くできた家庭用カメラで、子供の成長記録が多く残り、海外旅行中はサブカメラの役割を果たした。

どこが優れていたのかを書こうとして、ハタと困ってしまった。クランクレバー巻き上げ、二重像合致式の距離計と、絞りとシャッター速度が連動して設定される追針式自動露出計をファインダー内に収めた纏まりの良い設計には間違いない。ケレン味のないブラック&シルバーの落ち着いたデザイン、セルフタイマーも組み込まれている。ストロボは接点組み込みのホットシュー。先行機、例えば、ヤシカの「エレクトロマチック」などは、どんなに暗いところでもスローシャッターが追従することを売り物にしていた。「フラッシュマチック」の名称の元になったのは、ストロボの光量を示すガイドナンバーを予め設定して置けば、距離に応じて絞りが自動設定されるという、ちょっとしたアイデア。

初代 C35 が登場した 1968年当時、先代の機能をコンパクトに纏めただけで派手さはなかったが、ストロボが安価になった時代変化を見極めた「フラッシュマチック」登場が 71年。1975年の C35EF では、ストロボをカメラと一体化、「ピッカリコニカ」の名で爆発的に売れ、77年のオートフォーカス、C35AF「ジャスピコニカ」へと続く。下の子が生まれたのが 78年、サブカメラの購入はその後。私は出たばかりの新製品には手を出さない性癖があり、堅実なフラッシュマチックで手を打ったものと思う。ブラック&シルバーの基本に加え、元はプロ向けから広まった黒一色のヴァリエーションも揃えて何台も長く使った。



何気ない日常のスナップの残るのが、コンパクトカメラ最大の取り柄。



6台目： キヤノン スーパー 8

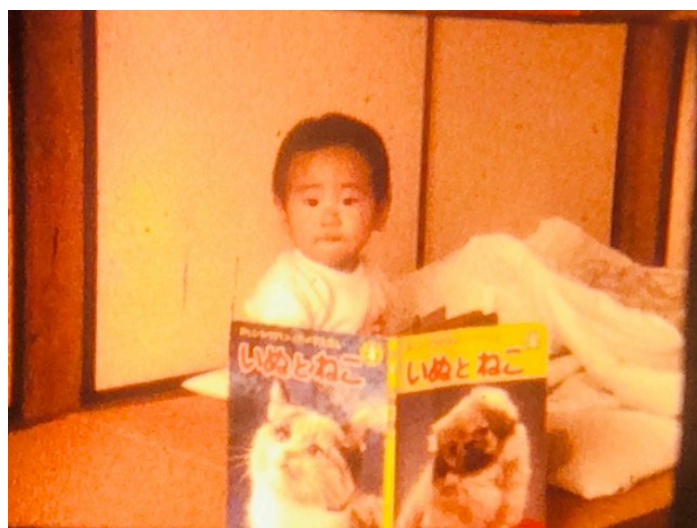
昨今は動画という言葉が定着したが、昔はスチールに対してムービーと呼んだ。アマチュア用の 8ミリフィルムは、16ミリのフィルムを半幅だけ使った後、折り返して残り半分を使う方式が戦前に始まり、戦後になって、スーパー 8 とシングル 8 の二方式が現れたのは、後の β と VHS のビデオカセットの戦いの前哨戦に過ぎなかった。

静止画に加え動画を残したくなる動機、最も多いのが子供の成長記録。私もそのご多聞に漏れず、カメラを入手したのは、娘が生まれた翌年の 1976 年。下の息子は 78 の生まれ。俗に、子供が可愛いのは 3 歳までと言うが、残されたフィルムの撮影年が如実にそれを証明する。



良く言われるのは、ムービーカメラを持つと、(静止画の) カメラの腕が落ちる、ということ。機関銃を持ったら、一発必中の腕は落ちて当たり前、確かにその通りだが、それがムービーの欠点ではないだろう。欠点は、寧ろ鑑賞の手間。映写機に加え、エディターも持っていたが、実際に編集に使ったことはない。不採用の部分が捨てられない一方、一人で観る分には簡易映写機となる。

また、そこから静止画を一コマ取り出すことはできなくはないが、何しろフィルムサイズが小さいから、並大抵のことではない。顕微鏡写真のことを考えれば、倍率を上げるところまでは頭で解決できるが、光源が発する熱のことに頭が及んだ頃にはもうフィルムが焦げている。そういう失敗を乗り越えて残ったのがこの一コマ。



撮ったままのフィルムはリールのままで残る。誕生日、ひな祭り、お散歩、乳母車、三輪車、ブランコ、あんよ、砂場遊び、こどもの日、プール、お祭り、お宮参り、七五三、プラレール、運動会 … その数 21本、年数にして 足掛け僅かに 6～7年。子供が可愛いのは、3歳までと言うから、二人でそんなものなのだろう。

21本、全てをサイレントのまま顔馴染みの写真屋で DVD 4枚にデジタル化して貰った。2万円の費用はそのうちの 2枚だったかも知れない。娘と息子に別々に渡すため、その DVD を複製して貰ったら、もう Data 形式が同じではない。家の DVD レコーダーで録画してファイナライズまでしてあるものが見えなかったら困るので、不安解消のため、再生専用のプレイヤーを新たに購入して、見えることを確認した。（ついでに、ブルーレイも、WAV 44.1K 規格の CD も、MPEG 規格の CD ROM も、再生は問題なくできることを初めて確認。）

時代的には、後発のチノンが只でさえ狭い 8ミリフィルムの淵に磁気録音帯を追加してサウンドトラック化まで実現していたが、編集はどうしたのだろうか？



私のカメラはサイレントながら、同時にカセットテープを回した録音も多少は残っている。それらが、お宝映像発見！となるのかどうか、私の目が黒い間かどうかとも判らないから、一応残してはおこう。

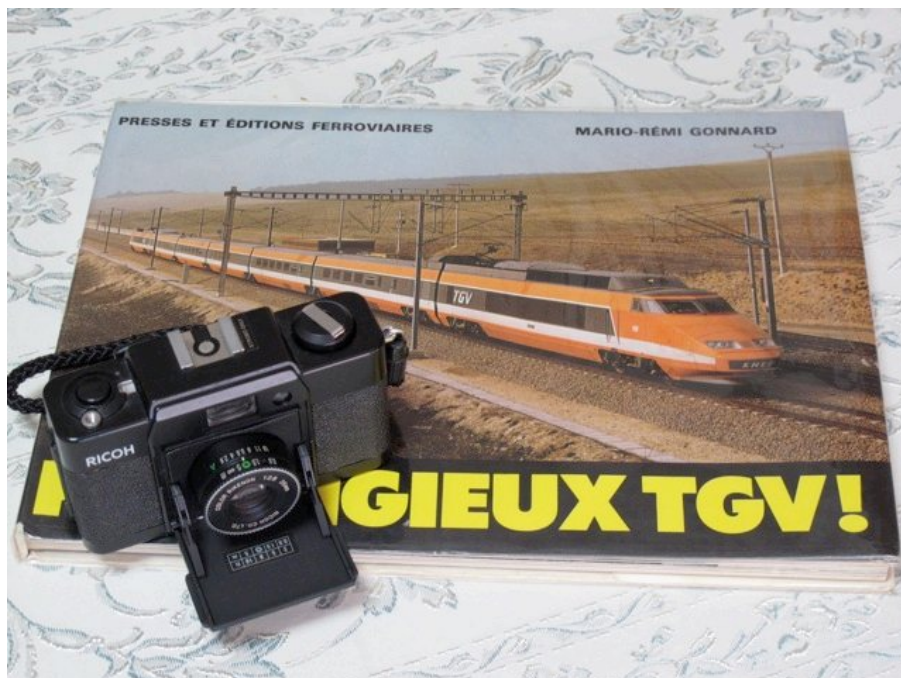
自身は使っていないが、3本ターレット、ゼンマイ巻き上げ駆動の骨董品、「Sankyo E」は元箱入りのまま岳父から引き継いでいるので、佇まいの美しさ、静態保存であっても、永く名脇役となるだろう。



7台目： リコー FF-1

海外出張の回数を重ねる私に比べ、その経験がない家内を伴って、冬のヨーロッパ旧婚旅行を思い立ったのは、1986年のこと。常用の 35～105ズーム付きペンタックスでは、とてもではないが重過ぎる。コニカ C35 を家内専用に廻し、自分用には「リコー FF-1」を中古で入手。

ストライキで間引き運転の TGV でスイスのジュネーブに到着後、レストランで昼食を済ませてバスで市内観光に出かけ、車内から何かの写真を撮ってフィルムを巻き上げたときに、嫌なことに気がついた。巻上げレバーがいやに軽いのだ。ドキッとして巻戻レクランクを起こして、ユックリ巻き戻すと、何回でも軽く廻る。しまった、やってしまった。フィルムが入っていないのだ。落ち着いて、いつ前のフィルムを抜いたのかを思い出そうとする。判った。昨日の夕方、2台のカメラのフィルムが同時にお終いになったので、両方とも入替えた積もりが、片方は入れるのを忘れてしまったのだ。枚数にして 5枚くらいしかないが、TGV を撮ったのがそっくりパーになってしまった。



リコー FF-1 は巻上げも焦点調節も手動、ストロボも外付けながら、リケハンの優秀なレンズを沈胴式にして、コンパクトにまとめている。技術屋さんが作りたいように作るとこうなる、という見本で、巻戻レクランクを畳むとク

ラッチがフリーになって、クランクを引きずらないでフィルムをスムーズに巻上げられる仕組み。だから巻上げは元々軽く、そのお蔭で巻上げミスの事故は起こり難いのだけれど、今回ばかりは、巻上げ時にクランクが引きずられて回ること、正常なフィルム給送が確認できることが、より大事な Spec. ではなかったか、とも思う。しかし、カメラのせいにするのが本意ではない。自分の不注意が分かっているから余計沈んでしまう。家内は、「その程度で済んで良かった、と諦めなさい。」と言う。それで、やっと気が晴れた。何しろ今日の TGV はストライキの合間を縫って、ちゃんと走ってくれたのだから。



シャモニーで昼食をとってからミラノに向けて出発。フランス側からイタリア側へ一気にトンネルで抜けると、アオスタの谷、クールマイヨール。谷の奥に位置する村は真青な空、真白なモンブラン（イタリア語ではモンテビアンコ）をバックにしたスキー場をかかえて賑わっているが、谷を下るにつれて積雪が少なくなると冬の収入源がない村の家々のたたずまいが、ぐっとさびれて来る。それでも南方が開けているアオスタの谷はいかにもフランス側より暖かそうな感じだ。歴史的にはかなり古く、ローマ帝国の頃からのルートの筈、川に面した崖の上などに古城が残っている。

アオスタでようやくハイウェイに入り、イブレアでトリノ行きの道と別れて、ミラノへと向かう。大分、暮れて来たが左手遠方にはまだてっぺんだけピンク色に染まっているアルプスの山々が見える。マッターホルンだろうか。ロンバルディア平原をひた走りに走って、夕刻、ミラノ到着。



リコー FF-1 の作例。1987年 1月 1日、暮れなずむベネチアのサンタマリア・デッラ・サルUTE聖堂。コントラスト極大のため、折しも聖堂の屋根に沈み行く夕日と木蔭の下でそれを眺める家内の双方に露出を合わせることは不可能。プロなら露出を 3段階変えて撮っておく状況に、数打ちや当る、を潔しとしない何気ないスナップ、ネガは 1枚しかなかった。トラバークした外資系会社でのフォトコンテストへの応募では、大伸ばしプリントの際、「覆い焼き」の手法で左右の露出に差をつけたのが功を奏して、銅賞を貰った。デジカメの時代になっても、ラチチュード(寛容度)は広がっていないが、今日の中級機には、複数露出の中から自動で良いところ取りをする機能が備わっている。

作例をもう一つ。それから 6年後、アメリカ長期出張中の余暇で訪れたニューオリンズでのスナップショットが、社内報の表紙写真に応募したところ、運良く採用された。喜んだ勢いで、裏表紙のカバーストーリーの中で、「写真にはレンズとフィルムと思い入れの三つしかファクターはない。」との自説を披露しているが、実のところ、いくら リコー FF-1 でも A4サイズ一杯の表紙写真ともなれば、35ミリフィルム原板からの大伸ばしには編集担当者の中で採否に意見が分かれたそうである。

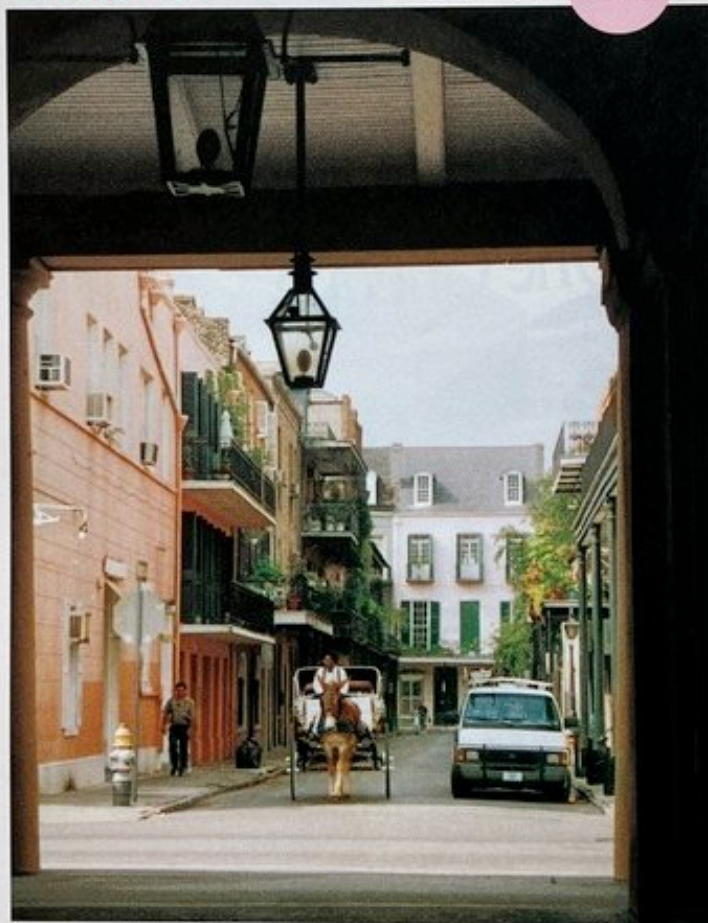
今月の特集 / ファイナンス

AMEX倶楽部

3月号

MARCH

1994



今月の カバーストーリー

アメリカ南部にあって、フランスとスペインの統治時代の影を色濃く残す街、ニューオーリンズ。

34時間もかけてフェニックスから列車で行ったので滞在は二日だけ。初日、ピンと来る撮影アングルを発見、が、車が邪魔で光線も悪い。翌朝、しめた、車はいない。観光馬車を待つことしばし、やっぴ一枚パチリ。よし、これは「AMEX倶楽部」表紙写真クラスだぞ。

幸い採用してもらって、「写真には、レンズとフィルムと思い入れの三つしかファクターはない。」という自説を再認識している次第。

テクノロジー ディレクター 西村 志郎さん



ミノックス 35

リコー FF-1 に纏わる苦い思い出。ジュネーブ市内観光の途中で見つけたカメラ屋でフィルムを買い足そうとすると、カメラに目を留めた店主が、何やら興奮気味に私を咎める。地域的にはフランス語圏の筈、「イミテーション」という罵り言葉以外は理解できなかったが、その一語が鋭く胸に刺さった。語感、模造よりも偽造に近いかなりの悪態、何が手本だと言いたかったのだろうか？ ミノックス 35 が先に出ていたのかどうか、そのときは知らなかった。

ミノックスというのは、下の写真では手前に鎮座する超小型カメラが発端で、後列左が件の、ミノックス 35。中央が純正ストロボ付きの、リコー FF-1。（前列は後の節に登場するミノックス B。）



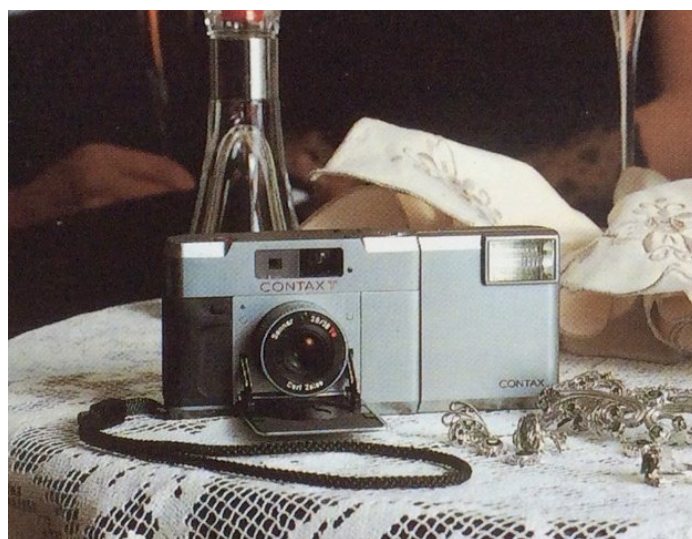
脇道のついでに一言加えると、右端がチタニウムボディの「ミノックス 35 M・D・C」。世界中のコレクターが欲しがらるレア物、英語の HP でも確認したが、何処にも M・D・C の意味が記されていない。持つ、というより、摘まむ、という軽さ、左手の指が掛かりやすいように埋め込まれたグリップ用の突起デザインは、ドイツよりも戦前のアメリカを連想してしまうのだが、そのウラも取れていない。沈胴式レンズを起こすのにモーターは使っていないし、電池は今も入手可能なので、動態の筈。動かなくなっても静態保存には耐えられる。

8台目：CONTAX T2

リコー FF-1 が欲しければ、ドイツの老舗、コンタックス T を知らなかった筈はなく、実際、カタログが手元に残る。軍門に下った日本のカメラメーカー、ヤシカも手放し、新参者の京セラブランドに甘んじてはいたが、カールツァイスのレンズにポルシェ・デザインの意匠、10万円に近い価格に指を咥えていたのだろう。



一点、リコーに負けていたのは、デザイン揃いの純正ストロボを付けると横幅が一気に 6割増しになるというアンバランス。誰が見ても分かるので、技術的に出来なかったのだろうが、他のを付ける選択肢はないから、ストロボは持たない痩せ我慢が格好良く、カメラごと諦めるがそれに準ずる、と言うのは、勿論屁理屈。



2代目、T2 になっても、強気な姿勢は保ったままの 12万円。欲しいとは思っていたので、程度の良い中古が半値になったところで入手。それ以来、旅のお供専用である。



使って何よりも感心したのは、ツァイスレンズの描写力。中欧旅行がご縁で長くお付き合いの続く Iさんと私がその同じ T2。帰国後の写真交換会に参加のもう一人、Kさんは同じシーンでの描写力の違いを見せつけられる形となり、即刻コンタックス党に宗旨替え。出たばかりのズームレンズバージョンを入手された。

素人には難題だったフィルムの入替えを旧来のパトローネに何ら手を加えることなく、ほぼ自動装填を達成したが見事だった。なかなかのアイデアだったのは、新しいパトローネをポトンと収め、フィルムの端を指定の場所に置いて裏蓋を閉じると、全コマ分、先に自動で巻出し、撮影が終わる都度、一コマずつパトローネの中に戻して行く、という逆転の発想。こうすると、フィルムが中に残っていることを失念してウっかり裏蓋を開けてしまっても駄目になるのは未撮影の部分だけで、撮影済みの貴重な方は、パ

トローネの中なので無傷、という発想。 フィルムの枠外に生産工程で焼き込まれるネガ番号と時系列が逆になるのが欠点と言えば欠点。（ついでに言えば、従前の方式だと撮影済みのフィルムが全部駄目になるかというと、実は表面の数枚だけ。 未現像フィルムは余り光を通さないため、内側のフィルムは助かる可能性が高いのだ。）

残って当然の名機、現物が残っていないのは、後継のデジタルカメラに実用面で敵わなくなってしまった時点で引退させたため。 全てが電池駆動の全自動カメラ、電池の規格は今も続くけれど、沈胴式のレンズが出なくなったら、飾るのにも事欠く。 そうなるのが怖くて手放したというのが本音。 本来なら、他のカメラもそうすべきだと思うけれど、ドッコイ、なかなかそうは割り切れないもの。

デザインもチタンの質感も申し分ないけれど、レンズが引っ込んだままの顔は少し間抜けてはいないか？ この前板は黒くするのが、デザイナーの仕事だと思うのだが …。 何らかの手法でレンズを手で引き出す裏技があったなら、元々半額で購入したものを売ってしまうことはなかっただろう。 その一点が ミノックス M・D・C と命運を分けた。



ローライ A26



ヨーロッパの旅行先のホテルで一瞬のスキに置き引きに遭い、カメラを失った父が代わりに購入したのが、ローライ A26。ドイツ語、英語、フランス語、スペイン語、イタリア語などだけで、日本語のない取り扱い説明書が現地購入の証。設計思想を一言で説明すれば、ローライ 35以来定評のある沈胴式単焦点レンズはそのままに、専用カートリッジの開発でフィルム交換の失敗をなくし、「押せば写る」究極のフルプルーフ化を実現したもの。シャッターボタンの他、唯一触るところが、目測式距離計。風景(∞)か、数人の集合(3m)か、最短距離(1m)を選ぶだけ。



左が露出計は組み込まれてはいるものの、後は全てマニュアルの元祖「ローライ 35」。右がそれを極限まで単純化した A26。フィルムは、フルプルーフの思想では右に出る者がいないアメリカのイーストマンコダック社が供給。画面サイズがロボットサイズと呼ばれる縦横約 28ミリの正方形なのは構える姿勢に縦横の差を無くす為。実際、良く写る。



海外旅行に出かける一団が成田空港で既に盛り上がっている。中央でカメラを構えるのが私の母。即ち、この写真は同行者から貰ったものなので A26 の作例ではない。機械に弱い女性でも良く映る、という意味なら、その作例をここに紹介すべきだが、紙面の都合で省略。父が購入した時は、母のために、という頭はなかったと思うが、実はそうだったのだ、ということにすれば三方丸く収まるから、そうだったことにしておこう。

ローライ 35



ローライ A26 との比較上、前節に登場しているが、本節の主演は右側の「ローライ 35」。何台目なのか表記がないのは、欲しかった時代には入手しておらず、岳父から数百台のカメラを遺品として受け継いだ中にもなかったのが、最初から骨董品として買った唯一のカメラだから。



カールツァイスのテッサー 40ミリ、f 3.5 レンズの定評は言うまでもなく、沈胴式なので携行品をコンパクトに収めたい山男ご愛用だった。一緒に仕事をしたことのある少し年上の Nさんもその一人、山と仕事のどちらが本業なのか解らないような生活だった。早稲田大学探検部の出身、大型の免許を持っていて、政情不安なカラコルムなど、登山以前に政情不安な周辺国との折衝から始まる時代、仕事に全エネルギーを使ってしまう、という点、私と同じ。ウマが合ったのはそれが理由だったと思う。

持ってはいなかったのに、1966年、西独のフォトキナ登場以降の評判はカメラ雑誌を通じて十分知っている。唯、35ミリフィルムを使うカメラとして最小記録が破られていない横幅 97ミリ、と言う数値は記事によって違いがあり、どれも厳密ではない気配。この記事を機会に、厳密に実測したところ、ビス頭の突出を除いて 96.6ミリ、リストストラップの受け金具まで含めるなら 98.6ミリ、と判明。97ミリで正解、と判定しておく。

私のは 1973年以降のシンガポール製。取り落として凹んだ軍艦部を綺麗に叩き出した修理の痕跡が残るから美術館の展示品としては一級ではないが、岳父はその叩き出し修理の名人だったので、私の記憶が曖昧になれば、岳父のコレクションに入ってしまう可能性が残る。

沈胴式のレンズはフィルム巻き上げに連動するシャッターとの関係で、いつでも収納できる訳ではないなど、設計条件から来る使い勝手の制約は頭で理解するとして、フィルム巻き上げレバーが左手なのも我慢、行き所がなくなった巻き戻しクランクもストロボのホットシューも三脚穴と同じ底面に追い込まれ、使い勝手の悪さも流石はドイツ流の設計思想。露出計の測光は CdS なので高感度ながら電池を必要とするが、知らなければ、どこに収納されているのか探し出せないかも知れない。なんでも小器用に改良してしまう日本人には良さの解りにくいカメラだとは思いますが、私には憧れの機種。リアルタイムで使ってはいないけれど、自分のカメラ評価尺度の原点と考えるので、ここに紹介しておく。

「写真の評価は芸術性とカメラで決まる。後者を構成するのは、レンズとフィルム、そして思い入れ。」技術進化は腕の良し悪しをカバーしてくれるかも知れないが、思い入れには敵わないので、三つしかないファクターへの影響はない。

9台目： カシオ LV-20



動かなくなった時点で、保存もせずに説明書もろとも廃棄処分した雑魚中の雑魚。こんなところで回顧することになるとは、頭が回らなかった。用途は明快、1995年頃、大学での授業に用いるパワーポイントの資料に画像を取り込むスキャナーとして使ったもの。メモリー容量を知らずとも、単三電池 2本で動き、USB ケーブルでパソコンに入力するにはそれで間に合ったのだから、カシオの潔さを賞賛すべき。カメラにせよ楽器にせよ、後発の新参者に市場を荒らされた古参会社は口を揃えて罵るけれど、それでお里が知れる。アナログテレビと同等の 30万画素の解像度、それで不十分かどうか、実際に見て頂くのが、フェア、というものだろう。

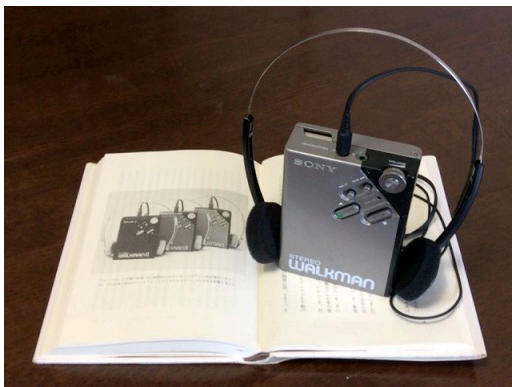


IXY デジタル 200



「IXY」の初代は、デジタルではなく APS フィルム時代の 1996年に登場。程なくデジカメ全盛の世となり、200 と 300 は、光学系ズームの倍率が違うだけの兄弟機種。デザインの観点から、「縦と横」を縦横無尽に使い分けた好例として記憶に残ったが、ジャンク扱いのコレクションとして入手したのは 20 年以上も経ってから。仕様面は、黎明期の極小 200万画素 CCD に大した期待はなかったろうが、ASA 感度 100、撮影枚数が照準画質で 24枚、という今日では信じられない程のメモリー容量が足を引っ張ったのに違いあるまい。

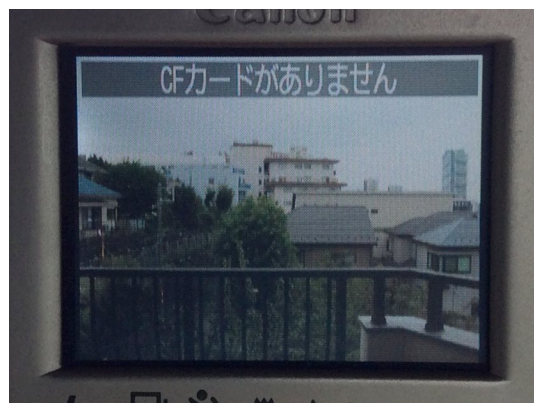
キャノンと言えば、ゼンマイ自動巻き上げのハーフサイズ、「ダイヤル 35」(1963年) が特異な縦長デザインを採用して、先行したリコーの対抗馬「オートハーフ」にデザイン面で差を付けたとされるが、私はそうは思わない。



ジャンルは異なるけれど、ソニーのウォークマン 2代目が採ったのと同じ思想、即ち表と裏で、縦重視と横重視の操作面がクロスしているのだ。



写真は、デジタル化直前の 35ミリフィルムのパトローネ(左)と、APS フィルムのカートリッジ(右)の大きさを比べたもの。息子が、どこの APS カメラを使っていたのかも知らないし、このネガもいずれ処分の運命。違いは大きさだけではないけれど、規格というものは、変更した時点で後発は満点でも 85点まで。その観点では、コダックのディスクフィルムに次ぐ最悪の規格だったように思う。



不動が前提のジャンクで入手したら、ありし日の姿を記録して後は静態保存が基本ながら、一応は蘇生を試みる。3.8V のリチウム専用電池は代替えが手に入らないが、USB の 5V電源ならいくらでもある。使い捨てのケーブルの極性を間違えないようクランプで挟み、強引に充電すると、1時間で電圧計が 4.2 Vの辺りで釣り合う。電源投入に成功！ 酸素吸入のようなもので、今際の言葉を残すだけの時間は記憶に戻る。そうか、君はこんな景色を見ていたんだね。もう電池切れ … アーメン。

10台目： Foma N704i μ 携帯電話



見ての通り、NEC 製の折り畳み式携帯電話。あと数年で GⅢ 通信規格の終焉を宣告されているので、スマートフォンに切り替える覚悟はできているけれど、ワイシャツの胸ポケットで携帯できるという世界最薄の記録、場合に依ると永世記録になる可能性が残る。電話の他は iモードも SMS も使わなかったのも、これをカメラの範疇に入れるのは抵抗があるけれど、常時携帯のメリット、残っていた写真をここに収めることにした。



なにしろ 30万画素、写真も一応写る、と言う範疇を出ないけれども、写っている 3人のうち 2人が彼岸に渡ってしまえば、元気だった頃の思い出、ないより余程マシ。撮影は 2009年 6月 20日。右は 2014年の撮影。FOMA N704i μ の入手が 2007年、G11 の入手が 2009年 10月、iPad の入手が 2014年の暮れなので、コンタックスを手放したのは、2007年以降、2009年以前、という逆算になる。JPEG 標準フォーマットのファイル名に情報日付が取り込まれて残る、というのが流石。(今頃褒められても困るのだろうが …。)

11台目： Canon パワーショット G11

何でフィルムカメラに見切りをつけたのか、今となっては思い出せないが、多分、カシオのオモチャデジカメであっても、1枚撮影して直ぐにパソコンに取り込める利便性に降参したのだと思う。入手したのは 2009年の秋。

選択基準は明快だった。

1. 重さ 350g まで。
2. フィルムカメラ時代の慣れを踏襲すべく、接眼式の光学ファインダーを備えること。
3. 背面のスクリーンを使わないときは収納できること。
4. テレビ画面に直接出力可能な HDMI の端子を備えること。

重さは長年の経験に基づく目安だが、これで一眼レフは全て脱落。画素数にも光学ズームの倍率にも言及していないのだから、随分雑な選択基準だが、この条件に当てはまるものは他に一機種しかなく、それが何で落ちたのかも覚えてはいない。（デザインで差が付いた可能性はある。）CCD はマイクロフォーサーズの大きさ、ジャンルはコンパクトデジカメを略して「コンデジ」と呼ぶらしい激戦区。



個人毎に違う視度調節機構が組み込まれた光学ファインダーの出来は申し分なかったが、実際には背面のスクリーンを多用するようになったのは、視野倍率の掛け値が大き過ぎたのが理由。一眼レフでもこれがピッタリ 100% なのはニコンくらいのもので、一般的には 90%程度まで安全サイドに倒してある。つまり、見えていない範囲も余計に写っているのは普通のことだが、G11 の場合、その数値が公表されておらず、実際のところ 70%程度。それでは、狙って写す、という意味がない。光学ズームレンズの都合上、それがノンリニア(非線形)であっても、そこはソフトウェアで補正するなど、手はあったろうに …。

ともあれ、今回もケースは手造りである。



左が携行時、右がフラップを開けたときの後ろ姿。



左がケースから取り出した本体の前面、レンズは沈胴状態。右がその背面、スクリーンは内側に折り畳まれているから、余りデジカメらしくもない。

話を先に進める前に、最初の写真をもう一度見ていただきたい。革を手縫いした内側にソフトパッドを備えたケースは、ベルクロでカメラの形を保っているが、折りたたむとペッタンコになり、撮影の間は、ポケットで待機する仕組み。知る限り、どこのメーカーも作ったことがないと思うが …。



背面スクリーンを裏返すと、デジカメが正体を現す。



スクリーンは、2軸で回転するので、この状態なら昔の二眼レフのように真上から覗くことができる他、左に 90度回転した上で表示面を前に向ければ、セルフタイマーで撮るときに画面が見えるなど、七変化。この機構に競合メーカーが手を出さなかったのは、電気配線の弱点になるのが明らかだったからだろう。実際のところ、最初に信頼性が怪しくなったのはそこではなく、右手のサムホイールスイッチ。凡そ 4年しか持たなかった。

1万円以上かけて修理したが、4年経てば同じところが壊れる。使い方を妥協して、騙し騙し使ってはいるが、隠居の身として処遇するしかない。

キャノンの一番の問題は、カメラもプリンターも、新機種を出したとき、操作系のツリー構造を継続せずに、そっくり新しくしてしまうこと。これを行われると体で覚えた指示命令系統を全部覚え直さなくてはならず、歳をとるとその OS 入れ替えの苦しみが乗り越えられなくなる。



スイス、ユングフラウ鉄道でユングフラウヨッホまで登ってツェルマットへの帰路、ゴルナーグラート鉄道のフィンデルバッハで途中下車、ラックレールと電車をカメラに収める。手にしているのが G11、ということは、この写真は家内がスマホで撮影したもの。カメラという単体商品の凋落を見越したようなショットではないか …。

この原稿を書いているのは MacBook Pro。iPad にキーボードを外付けしても全く寄せ付けないけれど、iPad の内蔵カメラは、昔の苦労は何だったのか、という程のお役立ち。G11 は好評らしく、中古市場では全くと言って良い程、お目にかからない。同じものをもう一度入手できる可能性は低く、これが私にとって最後のカメラになる可能性が高い。専用バッテリーは 2つを交互に使い廻しているが、自分とカメラ、どちらの寿命が先か …。

父の遺品、ミノックス B



元はラトビアで作られ、後に東ドイツに移転したスパイ用のカメラ。フィルムサイズは 11 x 9ミリの極小ながら良く写る。勿論それなりの腕前があつての話。ガッチリ三脚を構えて撮影した宣伝写真の出来栄えに感心するのが素人。カメラを向けられた人物が、「そんなオモチャで写るのかい？」表情を和らげた瞬間を捉えた紛れ当たりはあるにせよ、持つ意味は余りない。ドイツの技術信奉者であつた故佐貫亦男先生をして、「誰もが持ちたがるけれど、誰も使わないカメラ。」とまで言わしめたもの。

パトローネ入りの専用フィルムは高価だし、プリントもどこの DPE でも受け付ける訳ではないから、余程の愛着がなければ、直ぐに顎が出てしまう。亡父がその典型で、裕福な商家に生まれ、それなりの審美眼もあつた筈なのに、カメラを持たせても凡そ作品と呼べるレベルのものは何も残さなかった。このミノックス B は、カメラ修理を趣味にしていた叔父が、亡父の口癖をよく覚えていて、良品に出会ったタイミングで首尾よく入手、プレゼントしてくれたものと思う。

知る限り、撮影済みのネガは 2本しか発見されていないが、その中に我が家の家族全員が入っているものが見つかった。子供たちの歳から推定すると、1983年頃、場所は鎌倉の実家から山道を歩いて 10分の源

氏山公園。ネガの小ささを考えれば、これで良く写っている方だと言える。逆に言えば、この程度の描写力では持つ意味はない、と言うことがお判り頂けるだろう。



私の管理下に入ったのは父が亡くなった 1999年、ということになる。私自身、一本のフィルムも通さずに愛玩している。掌(たなごころ)に馴染む、と言う表現がこれ程当てはまるモノは他になく、電池を使わないセレンの露出計は気がついたら錆びていた、と言う心配もない。

クラシックカメラを語らせたら、田中長徳か赤瀬川原平か、そのどちらかの名台詞に、「骨董カメラの正しい楽しみ方は、フィルムを入れずにシャッターをチャージ、その音を愛でる。」と言うのがあった。正に、病膏肓に入る、だが、ミノックスの 2分の1秒スローシャッター、目で確認する手立てはないが、その音を聞いたら驚愕すること請け合いだ。

(初出 July 17, 2022)

秀逸なるミノックスのリストストラップ

「リストストラップ (Wrist Strap)」とは、「大切なものがスルリと手から落ちないように手首に引っかける環状の紐」のこと。本題からは脇に逸れるが、長い歴史を持つカメラもスマートフォンの一機能に取り入れられて消える寸前。原点に立ち返り、その要求仕様を考えてみた。

- (1) 不用意に外れないこと。(絶対条件)
- (2) 不必要なときは簡単に (工具なしで) 外せること。
- (3) 吊り下げて重心が紐の真下に来たときの姿が美しいこと。
- (4) 捻じれたら自由回転部がそれを解消するのが望ましい。
- (5) 取外したとき、その跡が見苦しくないこと。

相反する (1)と(2)を両立させ、(3)に配慮するのは機械屋の常識。(4)は好みの問題で、実益は然程でもない。(5)など、どうしても良いとは言わないまでも、ネジ穴が残るくらいは目をつぶれ、と考えるのが並の設計者。「ミノックス」はそこをどう越えたのかをここにご披露しておく。

取扱い説明書はなく、ミノックスのことに触れた書籍にも何の記事も見つからなかったのも、手にしてから暫くはリストストラップが外せるとは知らなかった。撫でまわしていたある日、「もしや、これが外す手段の糸口では？」と思い至ってからその手法が判るまでに要した時間は 1分。前述、(1)～(5) の要求に満点の回答を呈示され、唸ってしまった。



前ページの写真は、左がリストストラップ取り付け部を正面から見たところ。金属製の鎖は無限に回転可能なので振れることはない。D字形の金具が貫通する回転軸、沈むことに気づいたのはここ。じっと睨むと、相対するD字金具に対応するかのように溝が刻んである。その角度を保ったまま押し込んで行くと、0.5ミリを超えて、1.5ミリ程もピンが沈んで行くではないか。その状態のままD字金具で受けの溝を回転させるには、それなりの指先の器用さを必要とするが、90度回したら、右のように、ポロリと抜けた。

驚嘆するのは、抜けた形跡を全く止めない外観。 答を知っていれば、左のように元に戻すのは雑作ないが、もしもリストストラップが失われた状態で入手した場合、その平面が後退したら取り付く仕組みが隠れているなど、どうして予測できよう？ 正にピラミッドの羨道クラスの仕掛けである。

不思議なのは、「ミノックスとミニカメラ」の専門書にも、他に何冊目を通したか判らない沢山の本にも、佐貫亦男先生の「ドイツカメラのスタイリング」にすら、この秀逸な設計への言及が全くないこと。まさか先生がご存知なかったなど、とても信じられないから、そこだけが未解明で残る。「そんな枝葉末節に拘るのはお前だけ。」と言われたら、不承不承引き下がるけれど、納得はしていない。



カタログ写真に登場するのは、38代アメリカ大統領、ニクソン氏の若き日の姿。ソ連のキューバ侵攻危機の際には、ミノックスで撮影されたソ連側の機密文書が強力な証拠となった。その間の栄枯盛衰をミノックス社どう眺めたのだろうか？ その絡みだけで影の歴史になりそうである。

(初出 July 14, 2020)
(流用改定 Aug. 23, 2023)

12台目：「キャノン G12」

実家の片付けに行き、持ち帰ったものを、売れないけれど只でなら引き取ってくれるところへ処分に持って行った。その隣、予めから付き合いのある中古カメラ屋をちょっと覗いたのが運の尽き。

ショウウィンドウの目立つところに G12 があるではないか。値段は目に入らない。何か問題があれば値札に断るのがこの業界の商慣習だが何も断りがなく、マスクのせいもあったろうか、馴染みとまでは言えない私を店主は認識しないので、値切りもせずに言い値で買って帰った。

G11 から進歩したのは、人差し指のところにホイールが追加になっていて、どう使うかは自分でパラメータ設定するのだと言う。SDカードを入れ、シャッターを切ると、普通に写るが、シャッター音なし。それでは心もとないから今までと同じに変えたが、逆に言えば、困らない限り、新たにマニュアルを読まずとも使えるのではないかな？ そうだとして、保存するカメラが増えてしまうのは困る。



2日かけて主力機交代の受け入れ検査をしたが、結局、G11 を残すべき理由は見つからず、手放すことにしてお別れの記念撮影。左が後添いの G12。右は肩紐の草臥れが先妻の証、G11。ソフトケースを譲渡してその形見とする。

13台目：「iPhone SE」

Stay Home を強いられた 4年の歳月、私のようにコツコツと書き続けるタイプには基本的に好都合だったのだがその少し前から、電子出版主体に移行しつつあった軽さが、やはり不具合に直面しつつある。如何に主軸をそちらに移行しても、紙の製本を最小限残す意義を思い知らされたのは、一昨年、先に逝ってしまった 1年先輩の追悼冊子の発行作業に当たり、編集と製本の作業を分割、前半を丸々受けて下さった I 君の教えが大きい。一方、後半を担当した私は、お金で丸投げできる先を探したのだが、100部印刷して 90部廃棄、と言う極端な策でも取らない限り、道はないことが判明。ならば、その前提で零細出版を続けるしかない。

今回のような回顧録的テーマなら、年月が経過しても書き直しはしない積もりだった。実際、新たにカメラを買ったのではない。私にとっての iPhone は飽くまで年寄りの電子迷子札たる携帯電話。昔、携帯電話にたった 30万画素のカメラ機能がついたとき、それをカメラとしては使っていなかったことは先に述べた。今回も基本は同じスタンスだったが、現実問題として折角新古で入手した キヤノン G-12 が出番を失っている。私の iPhone SE は一番メモリーの小さな 64ギガモデル。そのカメラ機能というより、撮影後の編集機能には、銀塩の時代を知るものにとっては、感心を通り越して、憎たらしいと思うのが正直なところ。愛用カメラの列に加えることにした改心のキッカケは、今年のお正月、コロナ禍の為、暫く会えて居なかった孫と久々に会ったこと。



銀塩カメラの経験があるお嫁さんは何気無いスナップ写真が上手だ。前ページがその作例、4歳半の孫だけがカメラ目線で、周りの全員がその笑顔に注目する一瞬を逃さず捉えている。娘が驚愕したのは、その孫が撮影したこちらのポートレート。



プロモーション関係の撮影現場に立ち会うこともある娘は、モデルではないから、撮られることに慣れている訳ではないが、気づかれずに撮られた写真、ここまで表情が自然なものは、思い出せないと言う。

母親のスマホを借りての撮影、曰く、モノクロモード、階調をハイキーに強調、背景を白抜きにするとこのように映る、と言うが、それを理解の上で撮ったなどとは、いかに爺馬鹿でも信じられない。息子には岳父からも私からも写真術が伝わっているとは思えないし、母親の DNA の為せる技とも思えない。一瞬の操作の積み重ねが生み出したまぐれ当たり。それが私の解釈だが、IT 技術変革の時代には、銀のスプーンを手に生まれて来るより、スマホを手にした子供の先手必勝なのかも知れない、と驚愕している一面、無きにしも非ず。読者諸氏の判定や如何に？

前置きが長くなったが、この写真、最前列に鎮座しますが、遅まきながら愛用カメラの列に加わった件の iPhone SE。リストストラップは手が滑ることも想定した手首に巻きつくコイルバネ形状の部材がミソ。奥側、その煽りを食ってメッキリ出番の少なくなった iPad Mini。何年使ったか覚えていないが、海外旅行の出先で Mail が出来るという目的では十分その役目を果たし、iPhone にその役目を取られたら、出番を失った。下のキーボードは良く出来ているけれど純正品ではない外付けの製品。



この写真、どうやって撮影したか？ 新古品で入手した G-12 から SD カードを取り出し、右に見える専用アダプタで iPad に読み込んだ後、Air Drop という Mac 固有の優れた手法で今キーボードを叩いている Mac Book Pro に移し、MB オーダーの画像を KB にまで圧縮の上、WORD に貼り付けた。今風には、もっと気の利いた手法があるのだろう。古い MacBook Pro が動かなくなる前に、その対応策に迫られてはいるが、バックアップの手法として長年頼りにして来た USB の口が無くなったらどうしたら良いのか、不安が残る。アップル社のスマートフォン、これが最終形でないことは理解しているので、その評価は省略。認知症の進行が幸い遅れている元気な年寄りはどうすれば良いのか？ 答は沢山あるが、どれが正しいのかは選んだ人の自己責任。そう言う時代らしい。

(初出 July 7, 2024)

改訂2版 あとがき

執筆に着手したのはコロナ禍の最中、2022年。2023年からほぼ半年を費やして、手作り同人誌の同志である高校の先輩、T 兄の追悼記念号を形にできたのが、2024年初夏。それから、この原稿の纏めに取り掛かった後で、改版しようかと邪心したのが上手くなかった。

iPhone は、カメラとして入手した積りはなかったのだが、実際の役立ちようで判定すれば、やはりその範疇から外すのには無理があると思つての改心だったのだが …。

本来、執筆と編集は別物。頭がしっかり廻る間は、一人二役も無理ではなかった筈なのだが、慣れ親しんだ Mac Book Pro の上で走る OS のバージョンアップを拒み、Mac Office の2008版 WORD も安定して走りつつ、HP のプリンターとの接続性には少し制限がある。それも納得の上、ネットワーク接続は欠かせないので、5G ルーターを入れた。一応繋がってはいる。但し、予想したこととはいえ、概ね 4G にダウングレードしっ放し。まあ、高速が必要な訳ではないから、それも見逃す。しかし、2年抵抗した挙句、iPhone の OS を上げたら、Mac Book とのネットワーク共有が動かなくなってしまった。古い MacBook Pro が動かなくなる前に、後継機の準備に迫られているが、バックアップの手法として長年頼りにして来た USB の口が無くなったらどうしたら良いのか解らない。今春先輩の追悼冊子の発行に当たり、この記事を公開済みの工房 Nishi のホームページに追加するまでには未だ見えない峠がありそうだ。

今春先輩の追悼冊子の発行に当たり、編集と製本の作業を分割、前半を丸々担当下さった I 君からの教えが非常に大きいが、アカデミックな世界でのオーソリティに、そんな雑用をお願いするのも失礼な話。躊躇があったけれど、ひよんな雑談から、彼と私が同じ型番のプロ用大判カメラを共に動態保存していることが判明。然も彼はどこかからか新品のフィルムを入手済みだと言う。それなら話は簡単、暑さの砌を無事越えた頃、写真部のクラブ活動を再開するだけの話。狙うことはしないけれど、この作品の続編だって、「真夏の夜の夢」でもないのかも知れない。

2024年 7月 24日 土用の丑の日 西 志郎

原板の変遷で捉えるカメラの個人史

2022年 8月 3日	HP 公開用に PDF 作業開始
2022年 8月 20日	PDF 初版(公開に至らず)
2024年 2月 29日	HP 公開に向けて補筆改訂再開
2024年 7月 24日	紙製本に戻すため、改訂2版 (全 66ページ、MS Word 19.8 MB)
